

極  
秘  
溺  
愛

### プロローグ

人は生まれた瞬間に、神様から性格という個性を与えられるのだろうか。

それで言うなら、柏井実優は真面目という特徴だけを授かったのかもしれない。

親にとっては手のかからない子供だったのだろう。

幼少の頃から癩癩も起こさず、親、保育士、教師の言うことをきちんと聞く。

混ざりけのない真っ黒な髪をひとつにまとめ、地味な色の服を着て、俯き加減でクラスの端にそつと座っているような大人しい女の子。

いつもクラス委員に推薦されて、成績は常に優秀ランクをキープしていた。

そんなだから、実優が陰で『真面目ちゃん』というニックネームをつけられたのも仕方がない。

小さい頃から視力が悪くて、小学一年生から眼鏡をかけていたのも、そう呼ばれる要因のひとつになっっているだろう。

面白みのない性格。個性が死んでる。地味な見た目。

——『真面目』だけが取り柄。

ずっとそう言われていたから、実優も理解している。

こんな自分に特徴があるとするとするなら、それは『真面目』であること以外にないのだと。

刺激の少ない平凡な日々。辛いと思うような出来事はなかったけれど、特別楽しいこともない。真面目な性格だから、はめを外したいと望むこともない。

不満かと言えば、そういうわけでもなかった。

人として当たり障りのない、無色透明な自分は、場所が学校であつても会社であつても、すぐに馴染むことができる。

勉強が苦痛ではないのも得と言えは得だった。

中学の頃、両親に言われて英語塾に入り、特に反抗することなく黙々とカリキュラムに従つて学んでいたら、いつの間にか英語力は身につけていた。そのスキルは大きなアドバンテージとなつて就職活動にも役立ったので、実優は教育費を惜しまなかった両親にとっても感謝している。

他人から見れば順風満帆じゆんぷまんぱん。ソツのない人生に見えるだろう。

だが、刺激が一切ない人生というのは、つまらないのと同義だ。実優自身、自分の人生に潤いがないと感じる時もある。

でも、平凡はそこまで悪いものじゃないはずだ。

人生を海に例えるなら、その海は常に風状態かぜ。しかし、これが柏井実優の分相応な人生だから、それでいい。

高望みはしない。シンデレラになりたいなんて夢も見ない。現実的で結構。真面目な自分は堅実に生きることでしかないのだ。

……そう、思っていたのに。

誰が予想しただろう。平凡な人生を歩むはずの実優が、こんな夢みたいな状況まわいに陥っている。

実優も予想外だった。正直、現実についていけなくて目を回している。

「待つて待つて待つて！ お願いだから、私の話を聞いてください！」

「悪い、何か言ったか？ 話ならヘリの中で聞くから、少し待つてくれ」

慌てふためく実優の手をしっかりと握つてヘリコプターに乗り込むのは、さらさらした黒い髪にエメラルドの瞳をした美貌の男性。

重そうな音を立てて、ヘリコプターの扉が閉まる。

途端、実優はふわとした浮遊感を覚えた。

「飛んでる……飛んできますよ!？」

「それはそうだ。ヘリは空を飛ぶものだからね」

「違います！ あ、いや、違わないですけど、私が言いたいのはそういうことじゃなくて……!？」

どうしてだ。どうして？

実優の頭には疑問符しか思い浮かばない。

だってヘリコプターなんて、人生で一度も乗ることはないと思つていたのだ。それなのに、自

分は高い空の上から、美しい東京の夜景を見下ろしている。

「この国は美しいな」

「あ、ありがとう。って、私がお礼を言うようなことじゃないですけど」

「君が隣にいないければ、この美しい夜景も色あせていた。そういう意味では、私は君に感謝したい気分だね」

ニコツと笑って、透き通るようなエメラルドの瞳で見つめられる。

(その目で、私を見ないで)

実優は慌てて目をそらした。その翠玉の瞳には、不思議な力でもあるのではないかと思うほど、心まで吸い寄せられてしまいそうになる。

「実優、夜景もいいけど、私も見てほしい」

そっと肩を抱き寄せられて、どきりと心臓が高鳴った。

「だめ、ラトは素敵すぎるから、直視できません」

「そう言うな。普段のビジネススーツ姿の実優は凛として恰好良いけれど、今の実優は最高に綺麗だから、もっと見たいんだ」

かあつと顔が熱くなる。

今の自分は、驚くほどに着飾っているのだ。正直言つて似合っているとは思えない。

小さい頃から、黒とか茶色とかベージュとか、無難な色の服ばかり選んできたのに、今は薄紅色

のマーメイドドレスを身につけている。

もう自分が信じられない。お化粧だつて、髪型だつて、きつちりめかし込んで自分が自分じゃないみたいだ。眼鏡も取られて、生まれて初めてコンタクトレンズをつけた。

「実優」

耳元で囁かれて、びくりと肩が震える。

「今の君は世界一綺麗だ。私だけの宝箱に閉じ込めたいくらいだよ」

膝に置いていた手を優しく握り、実優の首につけられたネックドレスを親指で撫でる。

「この宝石も、君を飾るからこそ、いつそう美しく輝いているね」

繊細にカットされたダイヤモンドで縁取りされた、大粒のエメラルドのネックドレス。

実優はくらくらとめまいを覚えた。

(似合うわけないよ。こんな大粒の宝石なんて！ どうして私、こんなことになっているの!?)  
いっそ、夢だったらよかったのに。

だが、これは間違いなく現実だ。実優はラトという見目麗しい外国人の男性と一緒にへりに乗って、シャンパングラス片手に夜景を眺めて、自分の姿はお姫様みたいで、首には恐ろしいほど価値がありそうなネックドレスをつけられて――

「ああ、神様。これはどういうことなの?」

思わず、そんなことを呟く。

真面目だけが取り柄の自分は、つまらなくて平凡な日々を、死ぬまで歩いていくと思っていた。それなのになぜ、テレビドラマや映画のような状況に陥っているのだろう。

夢なら今すぐに醒めて、お願いします。

実優は目がくらむほどの美しい夜景を眺めながら、ぼんやりと彼に出会った頃のことを思い出していた。

## 第一章 ロマンズの始まりは、ひとひらのスカーフ

哀愁を誘う夕焼け色に染まった空に、綿花のような雲がひとつふたつ。

桜の枝は風に乗って柔らかに揺れ、それと共に薄紅色の花びらが舞った。

出会いと別れの季節——春。

十六時半、柏井実優は営業部の女性社員たちと共に、都心にある五つ星の老舗ホテルを見上げていた。

「やっぱりVIPを接客するなら、これくらいのホテルを使わないといけないのね」  
営業事務の女の子が感心したように言う。

「それにしても、営業部の女性社員ばかり集めて、こんな風に着飾らせて。部長ったら何を考えてるのかしら」

女性社員はみんな華やかなワンピースやドレスを着ていた。

そう、これから始まるのは、松喜エンジニア株式会社、グローバルエネルギー開発事業部、東京営業支社が総出で行う『接待』である。

女性社員に着飾ってもらったのは営業部長からのオーダーだ。唯一ビジネススーツ姿である実優

は、部長に説明された接待プランのメモを読み上げた。

「ラムジ・サロ・セルデア様。セルデア王室第一王位継承者です。今回、王子はお忍びで日本に視察に来られました。目的はセルデアのインフラ工事発注のためです」

実優は説明をしながら、頭の中でかの国についての概要を思い出す。

セルデア王国。

東ヨーロッパにある国の名である。東は海に面しているが、他の方角はすべて山脈に囲まれた小さな国で、総人口は一千万人ほど。険しい山と海に囲まれているからか、『自然の要塞国』と称されることもあるのだが、決して閉鎖的ではなく、むしろ様々な国と積極的に交流を続けている友好的な国だ。

山脈から発掘される高品質な鉱石が、かの国の主な産物である。

豊かな資源を持つセルデアは、世界有数の富裕国だ。

しかし、インフラにおいては途上国と言えなくもない。道路、鉄道、上下水道——生活の基盤となる技術発展が経済力に追いついていないのが現状だった。

ゆえに、セルデア王子は国外の企業にインフラ工事を発注しようと、異国からはるばるやってきたのである。

松喜エンジニアは、海外のインフラ整備を手がけた実績がある。それはアドバンテージのひとつではあるが、ことはそう簡単な話ではない。プラントやインフラ整備を得意としている会社は国

内だけでも数多くあるし、それだけではなく、セルデア王子は世界中の企業を吟味ぎんみしている途中なのだ。

上質な宝石に、金きんも産出しているセルデアの資産力は、他国にひけをとらない。

だからこそ、かの国と繋がりを持ちたい企業は世界中に星の数ほどあるわけで、今回のセルデア王族のお忍び来日は、受注に繋がるまたとないチャンスだった。

「それにしても、まさかウチの支社が接待するなんてねえ」

「本社にも営業部はあるのに、どうして支社がすることになったのかしら」

女性社員たちは不思議そうに首を傾げている。それは実優も同意見だ。

こんな一大事、普通なら本社が請け負うべきである。それなのに、なぜか本社は東京営業支社にセルデア王子であるラムジの接待を任せた。

支社長と営業部長は必死に接待プランを練り上げたようで、先日、営業部で働く実優は、女性社員のの引率を言い渡されたのである。

「うーん、失敗した時に責任逃れができるようにするつもりなのかな」

「ええ、責任重大じゃない！ これから私たち、王子様に会うんでしょう？ こんなドレスまで着ちゃったけど、うまくいく気がしないよ」

「でも、本物の王子様に会えるなんて二度とない経験だよね。どんな人なんだろう！」

キヤッキヤと騒ぎ出す。女の子は、大人になっても『王子様』というフレーズあはがに憧れを抱かずに

はいられないのだ。

しかし、実優は洗面を浮かべて話を続けた。

「実は、その……。ラムジ王子は、大変、女性好きでいらっしやいました……」

ぼそぼそ説明すると、全員の表情が一気に強ばった。

「あ、でも、接待自体は支社長と営業部長が行うと言っていましたよ。ただ、王子の態度を少しでも軟化させたいため、着飾った女性社員に同席してほしいのだそうです。もちろん私も座ることになりません」

実優の説明に、みんなは嫌そうな表情をしてそれぞれ顔を見合わせる。

「ええ、なんか、いやらしくない？」

「女好きの王子様とかすごい引くんだけど〜！」

先ほどまでの笑顔はどこへやら、女性社員のラムジに対する印象は地に落ちてしまったようだ。

「すみません。我慢を強いることになりましたが、会社の命運のためにお願ひします」

どうして自分が頭を下げないといけないんだ。こんな接待プランを考えた部長に文句を言っちゃりたい。実優は心の中で密かに愚痴を吐いた。

「まあ、毎日営業頑張ってる柏井さんに言われちゃ仕方ないか。とりあえず、ニコニコしてればいいんだよね？」

「はい！」

「これも仕事だよね〜ヤレヤレ。んじや行きますか〜！」

切り替えの早い人たちが良かったと心からホッとして、実優たちは支社長と営業部長がセツティングしている高級レストランに赴いた。

二時間後――

すっかり日は暮れて、夜空に星が瞬く頃。

実優はぐったりした足取りで駅に向かう道を歩いていた。

（つ、疲れた。部長たちの考えた接待プランはどんなものかと思っていたけど、あんなにも酷い内容だったなんて……！）

思わずため息をついてしまふ。

何というか、口で説明するのが嫌になるほど、最悪な時間だったのだ。

「はあ……」

ため息をつき、空を仰ぐ。春の夜空は澄んでいて、桜並木の切れ間から美しい月が見えていた。

「これは転職もやむなしかも……」

給与は悪くない額で、福利厚生も手厚く、それなりの中堅会社。実優にとって松喜エンジニアは居心地のよい会社であったが、『あんな接待』を女性社員に強いる上司がいる以上、身を切る覚悟で転職を視野に入れておくべきかもしれない。

(せつかく月が綺麗なのに、今夜は台無しだね)

もっと心穏やかな気持ちで月を見たかったが、仕方ない。今日は厄日だったということなのだろう。

こういう日はさっさと帰って寝てしまおうに限る。

実優は早歩きで、桜並木の歩道を進んだ。

——その時。

急に風が吹いて、ふわりと、上品な香水の匂いがした。

「え？」

振り向くと、サアッと桜の花びらが散る中を、柔らかそうなスカーフがヒラヒラと舞っている。

実優は思わず手を伸ばしてスカーフを掴んだ。すると風はやんで、シンとした夜の静寂が戻る。

「スカーフ？」

いったいどこから飛んできたのだろう。実優があたりをきよろきよろ見回していると、コツ、と靴音がした。

「すまない。首に巻いていたスカーフが、風に飛ばされてしまったようだ」

耳に心地良い低声。街灯の陰から、ひとりの男性が現れた。

実優は思わず、目を丸くして立ち尽くしてしまう。

(なんて——綺麗な、人)

ふたたび春の風が吹いて、実優が掴んだスカーフが揺れた。

さらさらした短い黒髪は艶めいて、まるで上質なシルクのように。

黒いタートルネックに白いジャケットを羽織った姿はとても似合っていて、すらりとスマートな高身長は遠目でも目立っていた。

何よりも特徴的なのは、瞳だ。

エメラルドの色をした目は、碧と翠が絶妙なバランスで重なった不思議な色合いで、美しく、目が離せない。

オリエンタルな雰囲気醸し出す相貌は恐ろしいほど整っていて、精緻な人形のように、すべての造形が完璧だった。

こんな人が世の中にいるのかと驚くほど、麗しい男性だ。

「拾ってくれてありがとう」

ニコリと微笑みかけられて、実優の心がドキンと跳ね上がる。

「い、いえ、たまたま掴めてよかったです」

なぜこんなにも動揺しているのだ。実優は胸に手を当てながら、当たり障りのないことを口にする。

実優は手に持っていたスカーフを男性に渡した。彼はニコリ微笑むと、実優と視線を合わせるように少しがんでみせた。



「なんだか、疲れてる？」

「えっ」

距離が——近い。

実優は足を下げて身を引いた。彼はくすくす笑って、体を起こす。

「実はね、君が向こうのホテルにいたのを見ていたんだよ」

「そ、そうなんですか？」

「うん。私もあのホテルのレストランで食事を取っていたからね」

レストランの中では自分のことで手一杯で、周りに目を向ける余裕などなかった。

（——もし、接待した『王子様』がこの人だったなら、こんなに心が沈んではいなかったかも。それ以前に、この人はあんなセクハラはしなさそうだけどね）

そんな独り言を心の中で呟いて、実優は思わず自分に呆れてしまった。

今初めて出会ったばかりだというのに、どうしてそんなことを考えてしまったのだろう。この人の顔が良いからだろうか。そうだとするなら、自分は意外とメンクイなのかもしれない。

そう考えるとなんだか可笑しくなってしまった。

「あ、笑った」

艶やかで、耳通りのよい声が聞こえた。

顔を上げると、桜並木を背景に、男性が嬉しそうに微笑んでいる。

「レストランでは、やけに辛そうな様子を見せていたけれど、何かあったのかな？」

男の問いかけに、実優は困った笑みを浮かべた。

ラムジはどこから見ても目立っていただろう。そんな彼の隣に座って愛想笑いを浮かべる実優はさぞかし滑稽に見えたはずだ。

「はあ、と疲れたようなため息をつく。

「単なる接待ですよ」

それも、最悪なレベルの接待だった。

実優たちは、ホテルのレストランに赴き、支店長や営業部長と合流した。そして約束の時間を少し過ぎた頃に件の王子が現れたのだが——

ラムジ・サロ・セルデア王子の印象を一言で述べるなら、『贅沢が服を着ている』だった。

すべての指に宝石のついた指輪を嵌め、太い手首には純金の腕時計。でっぷりと腹の出た肥満体。シンプルでゆったりしたセルデアの民族衣装を着ていたが、腰に巻かれたベルトは趣味の悪いヘビ革だった。

年齢は三十一歳らしいが、そうは見えない。食生活が偏っているからなのか、顔は酔ったように赤く、頬はたるんでいた。五十代と言われても納得してしまうほどの老け顔だった。

彫りの深い顔。青い瞳が、ねっとりとして実優たちを見る。

これが現実の『王子様』なのか。下品な成金を具現化したような姿に、実優を含めた女性社員全

員が辟易してしまった。

『なかなか粒ぞろいじゃないか。派手な装い、化粧が濃いのは好みじゃない。あそこにいる地味な娘がいい。この国では、ああいうのを探していたんだ』

ラムジが侍従に英語で話しかける。

英語教育に力を入れてくれた両親のおかげで、実優は彼らの会話がすっかり聞き取れた。

しかし、女を値踏みするような言葉に顔をしかめてしまう。彼はインフラ工事発注のための視察に来てははずなのに、いったい何をしに日本に来たのかと問い質したくなった。

かの王子を思い出した実優は、げんなりと肩を落とす。

「接待相手はやんごとない立場の方で、しかも日本人ではありません。いろいろと価値観が違うのはわかるのですが、彼はなぜか私を気に入ったご様子で……」

どうして初対面の男性にこんな話をしているのだろう。

わからないけれど、もしかしたら誰かに愚痴を聞いてほしかったのかもしれない。

そう、ラムジはどうしたことか、あの場において一番地味な見た目だっただろう実優に目をつけたのだ。

本来の実優は裏方役だった。装いもビジネススーツであつたし、綺麗に着飾った女性社員たちのフロアに徹するつもりだった。

しかし、ラムジの侍従は、実優に命令したのだ。『殿下の隣に座れ』と。

そう言われてしまえば、ホスト役としては仕方ない。実優はおとなしくラムジの隣に座った。そして地獄の二時間が始まったのだ。

「かの方はお酒を楽しそうに飲みながら、終始、私の太ももを撫でていたんです。あの手の感触を思い出すと、もう……心の底から落ち込んでしまいます」

がっくりと実優は肩を落とした。

ラムジの太い手がすると実優の太ももを撫でて——その感触を思い出した実優はゾワゾワと怖気立った。

接待は支店長と営業部長がすると言っていたはずなのに、彼らは決してラムジには近づかず、ただ手もみする勢いでニコニコしているだけだった。

何が接待プランだ。おそらく最初からこうするつもりだったのだ。贅沢を知り尽くしているラムジに生半可な接待は通じないと考えたのだろう。だから、女好きである彼の機嫌を取るために女性を侍らせたのだ。

知恵も策略もない、性接待にも等しい。社会人としてありえない。

『顔は地味で、目も髪も真っ黒で、特徴らしい特徴がない。だが、日本人女性はこうでなくてはな。ククク、今後が楽しみだ』

ラムジはそんなことを言いながら、いやらしい手つきで実優の太ももを撫で続けた。

あんな屈辱は生まれて初めてで、実優はふるふる拳を震わせる。

「それは辛かったね。私からは君の顔は見えただけれど、テーブルの下までは確認できなかった。可哀想だね」

名も知らない男性が優しい言葉をかけてくれる。

もしかして、これは新手のナンパなのだろうか。実優は一瞬そう思ったものの、すぐにその考えを打ち消した。

（私に限って、そんなことあるわけがないか）

きつとあの時、自分は、あまりに悲愴な表情をしていたのだろう。レストランでその様子を見ていた男性は、見かねて話しかけてくれているのだ。

『——本当に、あの汚い手を切り落としてしまいたいね』

「えっ?」

思わず実優は目を見開く。彼は今、小声で、しかも英語で、やけに不穏なことを呟かなかったか。すると男性はニッコリと人受けのよさそうな笑みを浮かべる。

「なんでもないよ。今日は君にとって災難な日だったんだね」

「そ、そうですね。はい」

早口で、しかもネイティブ英語だったので、ニュアンスを聞き間違えたのかもしれない。

「こういう時は、夜のデートで口直しはいかがかなと誘いたいけれど、さすがに今は遠慮したほうがいいだろうねえ。君は、私のことを知らないわけだし」

腕を組み、そんな冗談とも本気ともわからないことを口にする。

実優は訝しみながら男性を見上げた。

なんだろう……。彼とは初対面であるはずだ。しかし、彼は以前から実優を知っているような感じがするのは気のせいだろうか。

実優の不安を読み取ったのか、彼は安心させるように優しく微笑んだ。

サア、と柔らかな風が吹く。

月の光に照らされた桜はほのかな光を放っているように明るくて、不思議と男性の姿は鮮明に見えた。

「では、君にひとつ、魔法をかけてあげよう。——私たちはふたたび相まみえるという魔法だ」

彼はそう言っ、手に持っていたスカーフを実優の首にゆるく巻きつける。

「ど、どういことですか?」

「すぐにわかるよ。それまで、このスカーフは君に預けておこう」

そう言うと、男性は軽く実優の頬を撫でた。そして、ニコリと笑ったあと、きびすを返して去って行く。

少し強めの風が吹いた。春らしい暖かさのこもった風。桜の花びらが花吹雪のように散る中、男性のうしろ姿は夜の闇に消えていく。

ひらひら、ひらひら。男性が巻いてくれたスカーフが穏やかに揺れて。

実優は不思議に思い首を傾げた。

「変な人……」

なんだったのだろう。まるで幻でも見ていたのかと思うほど、男性は唐突に現れて、あつという間に去ってしまった。

「まあ、いいか。相まみえるとかどうとか言ってたけど、もしかしたら単なる酔っぱらいの絡みだったかもしれないし」

そう口にしたら、幻想的な出会いが途端に現実味を帯びてきた。やけに綺麗な男性だったので面喰らってしまったが、酔っぱらいだったのなら納得できる。

とにかく、自分は想定外のセクハラにすっかり参っているのだ。早くアパートに帰って化粧を落として、何もかもを忘れて眠ってしまいたい。

実優は足早に自宅へと帰って、だるい体に気合いを入れて化粧を落とし、シャワーを浴びた。そして早々とパジャマを着込んで、ベッドに飛び込む。

すう、と息を吸い込むと、上品な香水の匂いがした。

あの不思議な男性が身につけていたからだろう。テーブルに置いたままのスカーフからは常にあの匂いが漂っていて、それは不思議と、実優を甘い眠りに誘う。

その素敵な香りに導かれるまま、実優は静かに目を閉じた。

## 第二章 幻の正体は、ラト

ちゅんちゅん。ジリジリ。

可愛らしいスズメの鳴き声と、けたたましい目覚まし時計の音で目が醒めた実優は、憂鬱な気分になりながら起き上がった。

「あー、今日は会社行きたくないなあ」

そんな弱音が口から零れるけれど、真面目な実優がずる休みなどできるはずがない。思い出すのは、散々だった昨日のこと。

正直、一晩寝ても嫌悪感が取れなかった。セクハラはもちろんだが、それを平気で黙認した営業部長の態度も許せなかった。今まではそんな態度はまったく見せなかったが、本当の彼は、受注のためなら女性社員が傷ついてもよいという価値観を持っていたのかもしれない。

実優はため息をつく。

「居心地のいい職場だったんだけど、これは潮時かもしれないなあ」

会社に内緒で転職活動するのは、不義理だろうか。

しかし、真つ向から会社を辞めたいと口にする気はさすがに出ない。

「とりあえず会社に行つて……様子を見ながら、今後のことを決めよう」  
 実優はベッドのサイドボードに置いていた眼鏡をかけて手早く準備を始め、アパートをあとにした。

今日もすし詰め状態の通勤電車で揺られながら、ぼんやり車内広告を眺める。  
 一度転職を意識すると、どうしても『転職サイト』とか『企業説明会』の広告に視線が向いてしまふ。これはいよいよ決断するべきなのかもしれない。

(でも、接待でセクハラを受けたという理由だけで、辞めていいものなのかなあ)  
 今まで一度も退職なんて考えたことがなかったから、ことさら悩んでしまった。

世の中にはもっとひどいブラック企業でも頑張つて働いている人がいるのだから、これくらい我慢をしなくてはいけないのかもしれない。

だが、昨日のような接待をふたたびやれと命令されたら——自分はその時、頷けるだろうか。

実優が苦悶の表情を浮かべていると、電車が会社の最寄り駅に到着した。息苦しかった満員電車からようやく解放されて、ホッと息をつく。

職場は駅の改札を出て、十分ほど歩いたビジネス街の一角にある。松喜エンジニア株式会社の本社敷地内にあるビルで、今日も多くの社員が出勤している。

実優も社員証をICカードリーダーに当てて、ビルの中に入った。

いつも通り、代わり映えのない社内の景色。

そこにひとつだけ、異彩を放つ存在がいた。

「え？」

実優は思わず足を止めてしまふ。うしろから来た社員たちは、足早に実優を追い越していく。

目の前に、幻がいた。

いや、実際にはそうではない。まるで幻のように思った男性が、目の前に立っていたのだ。

まるで時が止まったみたいに、出社時間の喧騒が聞こえなくなる。

昨夜に、不思議な出会いがあった。ひとひらのスカートと、宵闇に浮かび上がる桜吹雪。実優にスカート巻いて、夢か幻のように去つて行った見目麗しい男性。

昨日と同じ、さらさらの黒い髪にエメラルドの瞳を持つ男性は、ニッコリと微笑んで実優に近づいた。

「おや、こんなにも早く、魔法にかかったね」

「あ、あ、あなたは」

実優は驚愕のあまり口をぽかんと開けると、眼鏡が下にずれた。

「私の魔法は意外と本物だっただろう？ 改めて、はじめまして。自己紹介をしてもいいかな」

「じ、自己紹介……？」

突然の再会に頭がついていかず、実優は驚いた表情のまま彼の言葉を繰り返す。

男性は自らの胸に手を当てると、きらきら輝くような極上の笑みを浮かべた。

彫りの深いエキゾチックな美しい顔は、まるで誰もが夢見る『王子様』みたい。

「私の名前はラト。実は、セルデアから来たんだ」

実優は目を丸くする。ラムジとは別で、セルデアから来日した人がいるなんて初耳だったからだ。彼は聞き惚れそうなほどの流暢な日本語で、実優に話しかける。

「どうか、あなたの名前を教えてくださいませんか」

「私、ですか？ 私は……柏井実優、といいます」

言われるままに名前を口にしてしまう。

するとラトは嬉しそうに微笑み、実優の手をそっと持ち上げた。

「よろしく。君に巻いた私のスカーフは、とてもよく似合っていたよ」

そう言っ、彼は実優の手の甲に軽く口づけた。

「ぎええっ!？」

男性に口づけをされるなんて、もちろん生まれて初めてである。実優は女性にあるまじき悲鳴を上げながら、ズサツと飛び退いてしまった。

ラトはそんな実優の反応を見て、クスクスと楽しそうに笑う。

「昨日かけた魔法の種明かしをしてあげるから、一緒にお昼をいかがかな？」

「お、お昼、ですか？」

「近くに良さそうな店を見つけたんだ。昨晚、どうして私が突然君の前に現れたと思う？ 気にな

るなら、その答えを教えてくださいよ」

そう言っ、ラトは実優に一枚のカードを渡した。会社の近くにあるレストランの名刺だ。

「待っているから、必ず来てね」

ラトはエメラルド色の瞳で実優を見つめ、ニコリと笑顔になると、きびすを返して去って行く。

次は、夜の闇に消えはしない。

実優は、ちょうど来たエレベーターに乗り込んだ。

しばらくぼうつと立ち尽くし、もらった名刺を見る。

「いったい、なんなの？」

まるで意味がわからない。だが、それこそ気になるなら彼の誘いに乗るしかないのだろう。

レストランの名刺には、トルコ料理の店だと書いてある。

「気にならないと言えば嘘になるし、答えを教えてください言うのなら、聞くだけ聞いてみてもいいのかな」

悩みながらもそう呟いて、実優は名刺をポケットに入れると、エレベーターを降りた。



正午から三十分ほど過ぎた頃、外回りから帰ってきた実優はガレージに社有車を停めた。

「やばっ、時間、大丈夫かな」

腕時計を確認しつつ、ビジネスバッグを肩にかけてレストランに向かって走る。

実優はふと、今朝の朝礼の一幕を思い出した。

昨日、あんなに最悪な『接待プラン』でラムジを迎えた営業部長。彼に対する女性社員の視線は大変冷やかだった。

めかし込めと言われて、その通りにしたら、ラムジの周りに侍らせられてひたすら愛想笑いを強要されたのだ。ホスト役であるはずの営業部長と支店長はその様子を見ていただけで助け船も出さなかった。実優が受け続けていたセクハラ行為も見て見ぬふりだ。

態度が冷たくなっても仕方ないことである。

しかし部長は部長で、完全に開き直っていた。

『会社人ならセクハラのひとつやふたつ、甘んじて受けるのが当たり前だ。女はそれくらいしか武器がないんだからな！』

朝礼の空気が10℃ほど下がった気がした。この一言で、部長の信頼は失墜したと言っているらしいだろう。

（確かに大きな商談に違いないのかもしれない。けれども、そんなに必死になってまで欲しい案件なのかしら）

はあ、と実優はため息をつく。

やはり、あの部長の下で働き続けるのは難しいかもしれない。

考えごとをしているうち、件のレストランに到着する。

実優は深呼吸をしてから、レストランの扉を開けた。すると、店のスタッフがやってきて、店内に案内してくれる。どうやら実優が来店することは、あらかじめ知らせてあったようだ。

「やあ、実優。お仕事お疲れ様」

「あ……ど、どうも。遅くなりまして、すみません」

店の奥にはソファ席があって、今朝会ったばかりのラトと、見知らぬ男性がひとり、座っていた。（誰だろう？）

朝はいなかったはずだ。髪は見事な金髪で、オールバックにしている。褐色の肌で、瞳の色は黒い。鋭い眼光に迫力がある、精悍な相貌をしていた。肩幅がやけに広くて、ラトの頭ひとつぶん背が高い。二メートルはありそうな大男だ。

ラトは笑顔で立ち上がると、実優の手を取ってソファに座るよう促した。

「このくらい、待つうちに入らない。むしろ、待っている間はわくわくしていたよ。来なかったら泣いていただろうけど、来てくれたから構わない」

「な、何を言っているんですか。ラトさん……と言いましたよね？」

「ラト、と呼び捨てでどうぞ。私の周りにはみんなそう呼ぶんだ」

「でも、初対面みたいなものですから、気が咎めます」

いきなり呼び捨てするなんて考えられない。するとラトは、実優の隣に座ったかと思うと、突然、膝に置いていた手を優しく握りしめてきた。

「ひえっ！」

「お願いだ。私はもっと実優と仲良くなりたいのだからね。『ラトさん』なんて他人行儀で呼ばれたら、悲しみのあまり昼食が涙の味に変わってしまう」

実優は目を丸くした。そして、思わずぶつと噴き出してしまった。

あまりに気障な台詞に笑ってしまったのだ。外国の男性はこのくらい挨拶みたいなものなのかもしれないが、聞き慣れていない実優は心の中がぐすぐつたくなってしまった。

「ああ、笑顔がとても可愛い。君は笑っているほうがずっと似合うよ。普段のキリツとした仕事の顔も素敵だけれど、実優の笑顔は見る者すべてを魅了してしまうだろうね」

「もう、おだてるのはやめてください。わかりました。ラトと呼びますから」

ひとしきり笑ったあと、実優はコホンと咳払いをした。なぜこども滑らかに歯の浮くような台詞が口に出せるのだろうか。外国人はみんなこうなのだろうか？

「ところで、昨晚の種明かしをして頂けるといいうことでこちらにお邪魔しましたが、教えて頂けるんですよね？」

「もちろんだよ。でも、まずは食事といこう。せつかくのレストランなのだからね。そうだ、料理が来る前に紹介しておくよ。あのデカブツの存在が気になっているだろう？」

ラトがチラと大男に視線を向ける。その男は実優やラトからは少し離れたソファに黙って座っていた。

「彼の名はハシム。私と同じ、セルデア人だ。私はセルデアのインフラ整備関係の会社の下っ端社員で、ハシムは私の部下だから、下っ端の下っ端になるね」

そう言いながら、ラトは革製の名刺入れから名刺を取り出し一枚渡してきた。実優は両手で受け取り、まじまじとそれを眺める。

「日本のビジネスは名刺交換から始まると聞いたからね、急いで作ったんだよ」

「セルデアでは名刺の文化はないんですか？」

「国内では滅多に見かけないね。でも、日本のみならず名刺の文化を持つ国はそこそこあるから、一応、我が社も申請さえすれば名刺を用意してもらえるんだ」

なるほど、と実優は頷いた。

名刺はすべて英語で、社名はセルデアヒューズテクノロジーと記されている。ラト・ハーディが彼の名前らしい。セルデアの土地には詳しくないが、住所と電話番号も記載されていた。

「そういえば、セルデアのほうって、公用語のセルデア語はあまり使わないんですか？ 名刺も英語ですけど」

「セルデアは他民族国家でね、様々な国からの移住者が多かったから、セルデア語の他に、英語も公用語として定められているんだよ。今では国民の八割が英語を使っているね」



「へえ、勉強になります」

実優が相づちを打つと、ラトは自分の胸を叩いてニッコリと微笑む。

「かく言う私も、アジア人とセルデア人のハーフなんだ。この髪の色はアジア生まれである母方の遺伝だろうね」

「なるほど。日本人として、少し親近感を覚えます」

外国人なのに、どこか馴染みのある雰囲気を感じていた。その理由は、彼の血筋にあったのだ。

「ちなみに、ハシムは生粋のセルデア人だ。それでもセルデア語はほとんど使わないんだよね」

ラトが軽く笑ってハシムを見た。彼は実優と目を合わせると会釈をする。

「ハシム……ハシム・ジタンです。ヨロシク、お願いします」

流暢に日本語を話すラトと違い、ハシムはカタコトの日本語で短く挨拶した。

「ご丁寧ありがとうございます。よろしくお願いします」

実優が頭を下げて返事をする、ラトがクスクス笑って「ふたりとも硬いな」と言った。

「ご覧の通り、ハシムは日本語が得意でなくてね。無口だし顔は怖いけど、平和主義だから安心してほしい。……おや、そろそろ料理がきたようだ」

ラトが顔を上げて、実優もつられたように視線を向けると、スタッフがテーブルに料理を並べていく。

ケバブ、ムール貝の料理、パンに野菜や魚を挟んだサンドイッチと、普段はあまり馴染みのない

オリエンタルな料理が並び、実優の目は物珍しさに輝いた。

「本格的なトルコ料理を食べるのは初めてです」

「それは良かった。トルコ料理は世界三大料理のひとつであると同時に、セルデアでは馴染み深い料理でもある。日本でも食べられるなんて嬉しいね」

そう言っ、ラトは取り皿を一枚取ると、ケバブをのせて白いヨーグルトソースをかける。

「はい、どうぞ。ラム肉は大丈夫だったかな？」

料理を渡された実優は「はい」と頷いた。

「特に好き嫌いはありません。とても美味しそうです」

ラトとハシムはそれぞれ取り皿に料理をのせると、両手を胸に置いて、なにごとかをブツブツ呟いた。実優が不思議に思っ、首を傾げると、視線に気づいたラトが穏やかに微笑む。

「食事前のお祈りだよ。セルデア語で、すべての恵みに感謝しますって言うんだ」

「なるほど。日本の『いただきます』と同じような感じですか」

「そうそう。イタダキマスとゴチソウサマ。日本の素敵な文化だよね」

「セルデアのお祈りも素敵ですよ」

実優が笑いかけると、ラトが優しく目を細める。

きらりとエメラルドの瞳が光って、実優は慌てて俯いてしまった。

（危ない。また見落とれるところだった。綺麗な顔もだけど、やっぱり瞳が印象的すぎるよね）

あのエメラルドの瞳。見慣れないからだろうか、どうしても気になって見つめてしまい、時々吸い込まれそうになってしまう。

実優は食事に集中することにした。ごはんを食べていれば、余計なことは考えなくなるはずだ。フォークとナイフを使って、こんがり焼いたケバブにヨーグルトソースを絡める。そしてぱくつと口に入れた。

「うん……！ とても美味いすー！」

ヨーグルトソースというのが、そもそもあまり馴染みのないものだ。まろやかな酸味とほのかな塩味のするソースは、ラム肉の独特の臭みをうまく打ち消していて、がっつりした肉料理なのにあっさり食べることができる。

「このソース、刻んだキュウリも入っていますね」

「そう。キュウリの爽やかな香りがあとを引く。日本にもこんなに美味しいトルコ料理を出してくれる店があるんだね。この国に滞在している間は常連になってしまいそうだよ」

ラトが上機嫌で料理に舌鼓を打っている。ハシムは黙って食べているが、心なしか満足そうな雰囲気を感じられた。日本のお店の料理を外国の人に美味しいと思ってもらえるのは、なんとなく日本人として誇らしくなる。

そんな喜びが顔に出ていたのだろうか。

食事をしていると、ふと視線を感じて、実優は視線を上げる。

するとラトはニッコリと嬉しそうに微笑んだ。

（うう、もつとちゃんと味わいたいのに。味が、よくわからないよ……）

ラトの目に、自分がどんな風に映っているのか。想像するだけで羞恥が極まる。とにかく食べることに集中しようと、実優が賢明に口を動かしていると、隣で「はあ」としみじみとした、ため息が聞こえた。

「本当に、可愛いなあ」

チラと見れば、ラトはテーブルに頬杖をついて、実優をジッと見つめている。

（……!! め、めちやくちや見られてる……っ）

顔から炎でも出てきそうだ。

「君と話すのがこんなにも楽しいとはね。やはり、昨日のうちに魔法をかけておいてよかった」

その言葉を聞いて、実優は食べ物を喉に詰まらせてしまう。慌てて水を飲み、ふうと息をついた。ずれた眼鏡を指で正して、彼に顔を向ける。

「そ、それです。お料理が美味しくて忘れかけていましたけど、私が聞きたかったのは、あなたが言った魔法についてなんですよ」

実優は口元を紙ナプキンで拭ってから、改めてラトに尋ねた。すると彼はおどけたような笑顔で軽く肩をすくめた。

「魔法のタネは簡単だ。私は以前からあなたに興味を持っていたんだよ」

「ど、どういうことですか?」

「私とハシムが来日したのは一週間前でね、最初は松喜エンジニアの本社や新エネルギーに精通している大学の研究所を視察していたんだけど、その間に東京営業支社で仕事をしている実優を見かけたんだ」

そう言うと、ラトは感極まったように、胸に手を当てる。

「正直言って、運命を感じたよ。なんて可憐な人なんだと、ひと目で好意を持った。そして私は、寝食を忘れて、仕事も忘れて、実優があのお支社で仕事をしている間はずっと陰で見つめていたんだ」

「な、なんでずっと」

驚きの告白に、衝撃が走る。

口に入れるところだったムール貝をぼろつと皿に落としてしまった実優に、ラトは指を伸ばした。

「ソース、ついているよ。可愛いね」

親指で実優の口元を拭い、ぺろりと舐めてしまう。

(いつ、いつ、いま、私、何をされたの?)

かーっと顔が熱くなって、唇がふるふると震える。

「でも、どうしても見ているだけでは我慢できなくなってしまっただけね。日本にいる間に、少しでもお近づきになりたいと思って、昨日、会社を出た君のあとを追いかけたんだ」

「お、追いかけていたんですか!」

会社ですつと見られていたというのも戦慄せんだうりつものだが、昨日、あとをつけられていたなんてまったくわからなかった。

「ということば、私が都心の老舗らしよホテルに入っていたのも?」

「そうそう。さすがにあそこまでの立派なホテルに入るのは躊躇ちゆうちゆしたんだけどね。しかし、まさかあの王子が来日していて、しかも君に近づくとは! 私の心は千々に乱れた。ハンカチを噛みしめ怒りに震えていたんだ!」

その時の感情を思い出したように、ラトは奥歯を噛みしめ、フォークを握りしめる。その芝居めいた仕草はどこまで本気なんだと、思わず実優は呆れた顔をしてしまった。

しかし、ふと思いつく。

「そうか、ラトはセルデア人だから、ラムジ殿下もご存じなんですね」

「彼はセルデアでも有名だからね。彼に泣かされた女性は星の数より多いと言われている。だから私は、君とラムジ王子の姿を見た途端に目の前が真っ赤に染まり、悔しさと怒りで我を忘れた。バターナイフを片手に突撃をしかけてしまったよ!」

「えっ!」

「安心してクダサイ。速やかにラトの後頭部を殴って気絶させて、止めマシタ」

少し離れたところで黙々と食事をしていたハシムが、カタコトの日本語で言った。

「そ、そう、ですか。あのレストランで、私が知らない間にそんなやりとりをしていたんですね……」

「ふふ、まあね。ハシムはそういうところ、非常に容赦ようしゃないから」

殴られたところが痛むのだろうか。ラトは頭のうしろをこれみよがしに撫なでる。しかし、ハシムは素知らぬ顔で食事を再開した。

ラトもこれ以上ハシムを責めるつもりはないのか、何事もなかったかのように話を続ける。

「私はすぐに意識を取り戻したものの、やはり気持ちが落ち着かなくてね……。仕方なく、ハシムに見守りを頼んで、ホテルの外に出た。満開の桜の下、君を想いながら待ち続けて、ようやく君はホテルから出てきてくれた」

聞くも涙、語るも涙、というように、ラトは人差し指でそっと目元を拭う。

本当にどこまで本気なのだろう。実優は嘘泣きかと思ったが、彼の目じりは光っていた。

「しかし、残念なことに、もうすっかり日は暮れていたんだ。夜道を歩く女性にいきなり初対面の男が声をかけたら、当然の話だけど警戒するだろう？」

「そ、それはまあ、そうですね」

「しかし、私はどうしても我慢できなかった！ 君にコンタクトを取りたかった。次の再会でスムーズにお近づきになりたいという魂胆があったからね！ だから、魔法をかけることにしたんだ」

実優は呆気あっけにとられる。

まさか、昨日スカーフを飛ばして『魔法』などと言い出したのは……

「魔法なんて言ったら絶対に不思議がるだろう？ その時点で私は『怪しい男』ではなく『謎の男』になる。謎は、少なからず解きたくなるのが人情だ。つまり、私は実優に少しでも興味を持ってもらうために、魔法なんて言葉を使ったんだよ」

「な、なるほど。ようやく……理解しました……」

思わず実優は脱力してしまって、がっくりとテーブルに肘ひじをつく。話を聞いたら妙に疲れてしまった。ラトという男は予想以上に奇妙な男である。

「でも、どうして私なんかに興味を持ったんですか？」

「もちろん可愛いからに決まって——」

「そういうお世辞はいりません」

キツパリ拒否すると、「ふはっ」とハシムが噴き出す。

まったく、可愛いだのなんだのと、調子のいいことを言われても恥はずかしいだけだ。実優は困った顔で咳払いをすると、水をひと口飲む。

「何か他に魂胆があるんじゃないですか？ でなければ、私みたいな面白みのない人間に近づく理由がありません。見た目だって、自分で言うのもなんですが、魅力的とは言えませんし」

「それはない。絶対に違うと断言するよ」

自分の言葉を真つ向から拒否されて、少しいじけた様子を見せていたラトは、唐突に真面目な顔を、正面から実優を見つめる。

「ま、またあの瞳……。直視できないから、まっすぐ見ないでほしいのだけど……」

自分はどうしてもラトの瞳に弱いようだ。昨日出会ったラムジの碧眼はまったく気にならなかったのに、不思議だと思ふ。

「実優、君は自分の魅力に気づいていないだけで、とても綺麗なんだよ。それに、仕事をしている実優はさらに素敵で、私はますます好意を持ったんだ」

「え……？ た、単に仕事をしていただけなのに、どういうことですか？」

面食らった実優が尋ねると、ラトはくすつと笑って人差し指を唇に当てて。

「それは内緒だ。君の素敵なところは、私だけで独占したいからね」

「なっ!? あ、あう……」

ぷしゅーと頭から湯気が出そう。

今まで真面目に生活することだけが取り柄だった実優は、色恋沙汰とは縁遠い人生を歩んでいた。

自然と、自分はそういう華やかな世界にはほど遠いのだと思ひ、恋をすることもなかった。

だからこそ、混乱してしまう。こんな風に言われるのは、生まれて初めてだから。

「本当に実優は照れ屋だな。そういうところもたまらない。やはりこの出会いは運命なんだろう。

いつそ君を捕まえて、誰も知らないところに連れ去りた——」

「オホン！」

唐突に、ハシムが咳払いをする。

いつの間にかラトにじりじりと迫られていた実優は、慌てて彼から距離を取った。

「あ、危なかった。なにがどう危険かわからないけど、ものすごい身の危険を感じたわ……」

ぜいぜいと息を整える実優に、ラトが困ったような笑みを浮かべる。

「残念。ここにはハシムがいるんだった」

実優は心からハシムに感謝した。ラトは気さくで人懐こくて話していても楽しい人だが、油断した途端、彼のペースに乗せられてしまいそうな空恐ろしさがある。

「まあそういうわけで、もうしばらくは日本にいる予定だから、気が向いた時にでも私の誘いに乗ってほしいんだ。食事とか、デートとかね」

「そつ、そういうのは、絶対に気が向かないと思います！」

「大丈夫。私の諦めの悪さはセルデア一だと言われているから。実優が頷くまで、私は星の数ほど誘ってみせよう。君のためなら、愛の奴隷と言われても本望だ」

「ア、アイのドレイつて」

どんな頭の構造になったら、そんな言葉が出てくるのだろう。

（やっぱり外国人の男の人って、気障な台詞が恥ずかしくないのかしら。怖すぎる……）

甘い言葉に免疫のない実優は、はいともいいえとも言えず、ハハハと乾いた笑いを零すのが精一

杯だった。



今日の仕事もつががなく終わって、実優はため息をつく。  
なんだか今日は、さっさと家に帰ってのんびり過ごしたい。

ラトとの昼食は半分楽しかったが、もう半分はやけに疲労してしまった。

相手が王子様みたいに素敵だからか、どうしても緊張してしまうし、彼は息を吐くように甘い言葉を実優にかける。

「あれは外国人特有なのか、セルデア人がそうなのか、もしくはラトの性格なのか」

帰り道、実優は苦悶の表情でブツブツと呟く。

昨日、ホテルで会ったラムジ王子の印象は最悪だったが、同じセルデア人であるラトは話しやすかったし、セクハラも女性蔑視の傾向もまっただくなかった。さりげなくエスコートしてくれるし、さらりと褒めるところは恥ずかしいからやめてほしいが、親切で心優しい人だと思う。

（王子様と庶民の違いってやつかな。王子様が傲慢なだけで、一般のセルデア人はまともな人が多いのかも）

それにしても失敗したと、実優は頭を抱えた。

「まさかお昼をご馳走してもらうなんて……！」

昼食を終えたあとに、ラトと一悶着あったのだ。カードでまとめて払いたいからお代はいらないと言うラトに、自分の分は払いますと実優はお金を用意しようとした。

しかし、その手はラトに取られて、さらに手の甲にキスマでされてしまう。実優は悲鳴を上げて飛び退いた。

「それなら、代わりにディナーをご一緒してもらおう」

「さっ、早速誘うつもりですか!」

「当然だ。これからの私はいつだって、実優をデートに誘う口実を探すつもりだからね」

「それなら余計に、ここでお金を払わせて頂きます!」

実優は財布を開けて紙幣を取り出す。そしてパッと前を向くと、そこにラトはいなかった。……いや、街路樹の並ぶ歩道のずっと向こうにいて、実優に手を振っていた。

「じゃ、そういうわけで、約束だよ!」

「かつ、かつ、勝手に約束にしないでください!」

ぎゅっと紙幣を握りしめて実優が非難の声を上げるも、彼は余裕の笑みで唇に人差し指を当てて、実優に向かって指を差し出す。いわゆる投げキッスだ。普通の男性がやったらドン引きの仕草だが、見た目が美しいラトがやると何ともサマになる。

実優が顔を赤くして手をふるふる震わせていると、すぐ近くにハシムがいることに気がついた。

彼はまるで実優に同情するかのような目でジッと見ていたが、やがて軽く会釈して、ラトが去った方向に歩いて行った。

呆然と立ち尽くす実優は、いつの間にかお昼をご馳走されて、しかもディナーの約束までするめに陥ってしまったのだ。

「はあ……」

昼のことを思い出した実優は、げんなりと肩を落とす。

自分の人生は、海の波に例えると凧のようだと思っていた。波乱は起きず常に平坦で、それはつまらないかもしれないが安穩で、平凡な自分には上出来な人生だと。

しかし、昨日からなんだかおかしい。人生という名の歯車が突然交換されたような違和感がある。自分は、ラトみたいな素敵な人に興味を持たれるような女ではないはずなのに。

「とにかく家に帰ったら、適当に料理して、録画したドラマでも見て……」

そんなことを呟きながら歩いていると、ふと、自分のすぐうしろで靴音が聞こえた。

「えっ?」

驚いて振り返る。だが、そこには誰もいない。

「気のせい……かな?」

首を傾げる。実優はふたたびアパートに向かった。

コツコツ、コツコツ……

実優がローファアの靴音を鳴らして歩く。

コツコツ、コツ、コツコツ、コツ。

「やっぱり誰がいる!」

勢いよく振り返った。しかし、実優の視線の先にあるのは、夜の帳が下りた薄暗い夜道だけ。電柱の上に設置された防犯灯が、ぼんやりとアスファルトを照らしていた。

「なに、なんなの……?」

えも言われぬ気味の悪さを感じた実優は、はじけたように走り出す。

はっはっ、はっはっ。

自分の吐息と速い靴音を聞きながら、必死に走り続ける。全速力でアパートに戻るとドアを開けて、勢いよく閉めた。カチリと施錠して、おそるおそるドアスコップから外を覗き見る。

(……誰もいない。やっぱり気のせいだったのかな?)

息を整えながら考える。靴音が二重に聞こえたのは、実優の靴音が近くのブロック塀に反響しただけかもしれない。

(そ、そうよね。びっくりした……。だいたい、私のあとをつける人なんているわけじゃない) ない)

だんだん自分に呆れ、つい笑ってしまう。

「自意識過剰ってやつかな。うん。……まあ、物騒な世の中ではあるから、百パーセントありえな

「話ではないけれど、今回はそうだったのよ」

自分の言葉に納得しつつ、防范意识は大事だと思い直して、実優はドアチェーンをかけてリビングに入った。

——しかし、その奇妙な違和感は、翌日になっても、その次の日になっても続いた。

最初こそ「気のせいだ」と思い込んでいても、あからさまに複数の靴音が聞こえたり、アパートの近くで不審な人影を見つけてしまったりは無視できない。

極めつけは、自分のアパートの玄関ドアだった。

安普請<sup>やすづん</sup>ではあるが、それなりに頑丈に作られたドアで、鍵はシリンダー錠になっている。

その鍵穴が傷だらけになっていて、ぎよっとした。

明らかに第三者が鍵穴をいじった跡。さすがに明確な恐怖を感じた。

しかし、理由がわからない。実優はお金持ちではないし、目立つ風貌もしていない。

(いや、私をつけ狙っているのが強盗のたぐいなら、ターゲットは誰でもいいのかも)

なにせよ、無視できる状況ではない。さりとして、どうしたらいいのか。

帰りに違和感を覚え始めてから五日が過ぎて、実優は会社で見積書を作成しながら悩んでいた。

その時、正午を知らせるチャイムが鳴る。お昼休みだ。

実優は途中だった作業をきりの良いところまで進めてから、財布を持って会社の外に出た。今日は弁当を作っていないので、コンビニで昼食を調達するのだ。

「やあ、こんなところで会えるなんて奇遇だね」

歩道に出た瞬間、声をかけられてぎよっとした。

声が出た方向を見ると、ラトが会社の柵にもたれて、ニコニコ笑顔で片手を上げている。ちなみに彼の隣には、ハシムが相変わらずの仏頂面<sup>ぶつちやうめん</sup>で立っていた。

「ラト！　そういえば、しばらく顔を見ないと思っていましたが、まだ日本にいたんですか」

「ひどいな！　しばらく日本にいたと言ったじゃないか。でも、嬉しいよ。少しは私のことを考えてくれていたんだね。私も実優に会えない日は寂しくて、夜ごと空を見上げては、君の笑顔を思い出していたよ」

流れるような仕草で、ラトは実優の頬に触れようとする。

だが、実優はサツと体をそらしてその手を避けた。さすがに何度も不意打ちで触られていれば、防衛本能も学習するのだ。

「そういう歯の浮くような台詞<sup>せりふ</sup>はやめてください。期待を裏切って申し訳ないですけど、実はラトのことはまったく考えていませんでした。それどころではありませんでしたので」

「ハッキリ否定されると、わりと深刻に傷つくな。ところで、それどころではなかったというのはどういうことだ？　なにかトラブルでも？」

傷ついたと口にしたわりには、ケロッと気を取り直して実優に尋ねる。

単に切り替えが早いのか、それともからかっているだけなのか。



実優は微妙な疲れを感じる。

「気のせいだと思いたいのですが、最近、私の周りで妙なことが起こってしまして」

「ふむ、立ち話で聞くような話ではないようだ。こちらにおいて。駅の近くに落ち着いた雰囲気のカフェを見つけたんだ。そこで話を聞こう」

言うや否や、ラトは駅に向かって歩き出す。実優は慌ててついていながら、彼に言った。

「今日は、私が支払いますからね」

「ええー？」

「何を不満げな声を出しているんですか！ だいたい前回だって、あなたは問答無用で支払いを済ませて、しかも一方的に私と約束して逃げたでしょう!？」

「だってそうでもしないと、君をディナーに誘うのは困難だと思ったんだ」

困ったようにラトは頬を掻いて、苦笑いをする。

「恋を知った男の情けない悪足掻きだと思えば、ほら、許せそうな気がしないか？」

「しません。とにかく……もう、勝手にそういうことをするのはやめてください。ディナーのお約

束は……その、守りますから」

最後のほうは小声で、しかも早口で言った。しかしラトは耳聴く、バツと実優に顔を向けると嬉しそうに両手を掴んできた。

「本当かい!？」

「だ、だって仕方ないじゃないですか。実際、ご馳走されちゃったわけで、支払いの代わりにディナーにつきあうって話になっちゃったんですから……っ」

実優がたじたじになって言うと、ラトはニコニコ上機嫌で手を繋いでくる。

「良かった、嬉しいよ。それなら今日のところは折半せっぽんということはどうかな？」

「そ、そうですね。そのほうが私の精神的負担も少なく済みます」

面食らいながら頷いた。自分で言うのもなんだが、実優は決して美人ではないし、見た目は地味で、性格もそう魅力的とはいえない。それなのにどうしてこんなにもラトは喜ぶのだろう。こんな自分とディナーに行っても、きっと楽しくないと思うのだが。

手を繋いだラトと実優、そして少し離れてハシムが最寄り駅近くにあるカフェに入店する。そこはラトが言ったように落ち着きのある喫茶店だった。

流行のカフェチェーン店ではなく、昔からある喫茶店という感じだ。店内はゴシック風の装飾でまとめられ、広すぎず狭すぎもしない。客入りはまばらであったが、街の喧騒けんそうが嘘のように、静かな音調のクラシックが流れている。

「このあたりの店はいろいろ巡ってみたんだけど、ここが一番コーヒーが好みだったんだよ」

「ラトはコーヒーが好きなんですね」

ソファ席に向かい合って座り、ハシムはラトの隣に腰掛ける。

「そうだね、朝は必ずコーヒーを飲むのが日課になっているよ。実優はコーヒーは好き？」

「はい。必ず飲むというほどではありませんが、気分転換したい時には飲みたくありませんね」  
「そうか、とラトは笑って、店員にコーヒーを三つ注文した。」

「そうだ、ランチが済んでいないのなら、ここで食べていくかい？ 自家製ビーフカレーがなかなか美味だったよ」

「それは気になりますけど、元々コンビニでおにぎりを買う予定だったので大丈夫です」

正直なところ、のんびり食事という気分になれなかった。

実優がそう言うと、ラトは「わかった」と頷く。

「それで、どんなトラブルに巻き込まれているのかな？」

「トラブルってほどではないと思うんですけど」

実優はここ最近、自分の身に起きていることを説明し始めた。話している途中でコーヒーがテーブルに置かれたので、実優はコーヒーカップを手取る。

ラトは腕を組み、形のよい顎に手を添えて、やけにシリアスな表情で話を聞いていた。

「——そんなわけで、やっぱり気のせいかもしれませんけど、鍵についてはどうしても無視できなくて」

「そうだね。可能ならすぐにでも鍵を替えるべきだと思う。シリンダー錠はものにもよるけど、簡単に合鍵が作れる可能性が高い。こういう時、日本は警察に相談したら動いてくれるものなのか？」

「……まず動いてくれないと思います。ものを取られたとか、事件性がないと」

「そうだろうな。セルデアの警察も同じだ。となると……よし！」

ラトは名案を思いついたようにニッコリと笑顔になった。

「私が実優のボディガードになってあげよう」  
「プフッ」

彼が提案を口にした途端、隣のハシムが飲んでいたコーヒーを軽く噴き出す。そしてグルッと横を向いたかと思えば、ラトのネクタイを掴んで引っ張った。

『お前、何を考えているんだ。自分の立場をわかっているのか！』

——英語だ。実優は目を丸くする。

（そうだった。ラムジ王子も英語を使っていたし、本当に英語はセルデア語よりも日常的に使われているんだわ）

しかし、ハシムはやけに怒っている。実優はコーヒーを飲みながら様子を窺う。

『問題ないよ。彼女の違和感は夜の帰り道だけなんだから』

『それは、そうだが』

『私の仕事に支障はない。君の負担は増えるかもしれないが』

ニヤ、とラトが意地悪げにハシムを横目で見上げると、ハシムがウグツと苦々しい顔をする。

「あ、あの、お話ししているところ申し訳ないのですが、私はボディガードなんて結構ですよ」  
「コーヒーをソーサーに戻してから、実優は静かな口調で断る。」

「ラトがセルデアからわざわざ日本にいらしたのは仕事のためなんでしょう？ 私にかまけている時間はないと思いますし、私としても、おふたりの負担になるのは困ります」  
相談はしたものの、別に彼らに守ってほしいと思っただけではない。

ラトが口にしたように、まずは鍵を替えるのが一番良い対処法だ。それから、いつもの帰り道のルートを変えてみるのもいいかもしれない。

今のところ実害はないのだから、防犯意識を強めればなんとかなるだろう。

実優がそう結論づけていると、ラトが爽やかな笑顔を見せて実優に話しかけた。

「負担だなんて露ほども思っていないよ。どうか私に、君を守らせてほしい」

「で、でも」

「ハシムも困っているレディを放っておけるような冷血漢ではないよ。そうだろうか？」

ジ、とラトが意味ありげにハシムを見ると、彼はウツと一瞬洗面を見せた。しかし、オホンと咳払いをして、ゆっくり頷く。

「ほらね、ハシムも実優が心配なんだよ」

「そ、そうなんですか？ さすがにボディガードなんて、大仰すぎるような気もするんですけど」

「そんなことはない。防犯において最も大切なのは、実優自身がきちんと危機感を持つことだ。鍵を替える、帰り道のルートを複数作る。守られているという自覚を持つ。とりあえず、今はこの三

つを守ることに徹するといー」

「鍵や帰り道のルートは理解できますけど、最後の、守られている自覚というのは何ですか？」

実優が首を傾げると、ラトはコーヒーカップを片手に持って、もう片方の人差し指を立てた。

「護衛というのはね、守る側が警戒するだけではだめなんだ。守られる側も、自分が守られていることを意識しなくては完璧な護衛にならない。こまめに連絡を取り合って、互いのスケジュールを把握し、いざという時には遠慮してはいけない」

その言葉にはやけに真実味があつて、実優は思わず聞き入ってしまった。

ラトはエメラルドの瞳をまっすぐに向けて、真剣な表情で言葉を続ける。

「守られる側は、自分の身を守ることに専念すること。それが、守る者に対する礼儀であり、義務なんだ」

「……ラト」

こんなに真面目なラトは初めてだ。まるで彼も、誰かに護衛されたことがあるみたいに、その言葉には実感が籠もっていた。

ラトになんと言葉を返せばいいかわからない。実優が戸惑っていると、彼はシリアスな雰囲気を一掃するように爽やかな笑みを浮かべた。

「なんてね。セルデアは日本に比べると安全とは言えないから、これはセルデア人みんなが持っている防犯意識みたいなものだ。まあ、日本と比べたらどの国も治安が悪いんだけどね」

ラトがははつと笑うので、実優もつられたように笑う。

「そうですね。私は日本から出たことがないけれど、世界の中でもとりわけ安全な国だって聞いたことがあります。それでも最近は物騒になったかもって思いますけどね」

「二十四時間営業できる店があるというだけで充分安全だよ。それに、夜中でも女性が普通に街を歩き回ってるのもすごいね。初めて見た時は、びっくりしたよ」

「……考えてみると、日本はちょっと平和ボケしているのかもしれないね」

「いいことじゃないか。平和に感謝することは大切だけど、平和を当然のように享受できるというのは、とんでもなく恵まれたことだと私は思うよ」

そう言つて、ラトは少しだけ寂しそうに目を伏せた。

「セルデアは今でこそ平和だけど、ほんの二十年前までは内戦の絶えない国だったんだ。セルデア王族がたくさんの派閥を作つてしまつてね。外国の私設部隊を大量に雇い、さらにセルデアを乗っ取ろうとする大国も現れて、国は大混乱に陥<sup>おち</sup>つていた」

実優は目を見開く。セルデアにそんな時代があつたなんて知らなかった。

二十年前といえば実優が四歳の頃だ。もしかすると、その頃はニュースや新聞でセルデアの内戦が報道されていたのかもしれない。

「でも、今の王が内戦を終結させたんだよ。国のあらゆる鉱脈はすべて王室が管理し、その利潤は国民にすべて分け与えるという法律を作つた。争いの火種になつた側室制度は廃止した。おかげで

国民の生活水準は飛躍的に向上し、王位継承者もふたりだけに減つたんだ」

「側室……。確かにそんなのがあつたら、王位継承者がいっぱいになつてしまいますね」

「出生率の低かつた大昔の制度がずっと続いてきたみたいだね。二十年前の王位継承者は、今の王を含めて二十七人もいたんだよ」

二十七人！ 実優は驚愕してしまふ。さすがにそんなに多かつたら諍<sup>いさか</sup>いも起きやすいのかもしれない。

ラトはテーブルにのせていた実優の手を握つた。

「でもね、今は本当に平和なんだ。私は、セルデアの平和がずっと続けばいいと思うし、いつかは日本のように夜中でも出歩ける、まさしく平和ボケするような国になつてほしいと願つているんだよ」

「う、はい。そうですね。そう言われたら、平和ボケも悪い言葉じゃないかもですね」

実優は顔を赤くして頷く。頼むから、ことあるごとに手を握るのをやめてほしい。外国人はスキンシップが好きだと聞いたことがあるが、ラトもそうなのだろうか？

「実優にも見てほしいな。セルデアから見える美しい海を。荘厳<sup>そうえん</sup>な山脈を。街を、人を。……私が大切にしているものすべてを」

透<sup>す</sup>き通るようなエメラルドの瞳が、切なく実優を映し出す。

どうしてそんな表情をするんだろう。内心疑問を覚えながら実優は微笑んだ。

「ラトは本当にセルデアが好きなんですね」

「そうだね。君の次に愛しているよ」

「……また、そういうことを言う……」

ガクツと肩を落とすと、眼鏡が下にずれてしまった。母国を大切に想うラトは素敵だなど思った矢先にこれだ。調子がいいというか、息をするように齒の浮くような台詞セリフが言えるのは、もはや才能なのかもしれない。

「さあ『善は急げ』だ。まず、連絡先を交換しよう。君は至急鍵を替えに行ったほうがいいね。それから会社からアパートまでの地図を見せてほしい。退社時間までにハシムが帰宅ルートを複数考えるから、合流して一緒に帰ろう」

「あ、はい。私なんかのためにいろいろ考えてくださってありがとうございます」

思わず礼を口にする、ラトは少し意地悪な雰囲気を目を細めた。

「次、『私なんか』と、自分をネガティブに言ったら、唇にキスをするからね」

「えっ!?!」

「実優は奥ゆかしくて素敵な女性だと思うけれど、度が過ぎた自虐は気づかないうちに自分を傷つけるものだ。だから、君がひとつ自虐したら、私がひとつ幸せを差し上げよう」

「幸せって、キスが幸せなんですか!?!」

どう考えても罰ゲームに近い。

顔を熱くした実優が問いかけると、ラトは蕩とろけそうなほど極上の笑みを浮かべた。

「もちろんだよ。キスは人を幸せにさせる。ひとつ試してみるかい?」

——実優は速攻で首を横に振った。

第三章 本当の、スカーフの種明かし

尾行されているかもしれないと不安がる実優を安心させて、ラトは少しずつ、だが大胆不敵に、彼女と距離を詰めていく。

砂糖をたっぷり入れたチャイみたいな甘い言葉と、気遣いのあるエスコート。

ハシムはラトの惜しみない愛情の押し売りをずっと黙って眺めていたが、そろそろひとこと申し上げなければと思った。

『ラト。さすがに、やりすぎではないか』

喫茶店で実優と別れたあと、ハシムは英語で話しかける。

『そうか？ これでも抑えているほうだが』

ラトも英語で答える。ハシムは頭痛を覚えて、手で額を押さえた。

『あれ？で……？』

ラトが遠慮しなくなったら、どれほどパワーアップしてしまうのか。もはやハシムは想像もつかない。

『さて、次の視察はどこだったかな』

『十五時より、国立大学の鉱物研究所で教授より話を伺う。昨日、ラムジが訪問したばかりのころだ』

『ふむ、それならまだ記憶は新しいだろうから、詳しい内容も教えて頂けるだろう。あの強烈な御仁は、一度見たらなかなか忘れるものでもないけどね』

くすくすとラトが笑う。ハシムはびくりとも表情を動かさずに、駅前のロータリーに向かった。

『それにしても、勇気を出して日本に来て本当に良かったなあ。実優に出会えたのが一番だけど、食事は美味しいし、優しい人が多いようだ。あと、感動したのはトイレだね。日本人のトイレ好きは話に聞いていたけれど、もはや芸術性を感じるよ』

『日本人はトイレ好きというより、清潔好きなんだろう』

ハシムは洗練された町並みを眺めながら言う。二十年前、内戦が終焉を迎えてから、セルデアはずいぶん発展して近代化した。しかしこの国に比べたら、満足とは言えないだろう。

まだまだ課題は多い。早急に対処しなければならぬ問題もある。

『清潔好きか。確かにそうかもしれない。最初にホテルのトイレに入った時は戸惑ったよ。謎のボタンが多いし、勝手にフタが開くし、あたふたしている間に水が流れて』

『……ラト』

はあっとため息をついて、ハシムはラトを睨む。

『日本が物珍しい国なのはわかる。だが、俺たちがここに来た目的を忘れていないだろうか』

駅前のロータリーで、客待ちをしているタクシーに乗り込み、釘を刺した。

『もちろんだ。私が日本に来た目的はただひとつだよ』

人受けのよい笑みを見せるラトに、『それならいいが』とハシムはため息をついた。

ラトとハシムは、確固たる目的があつてこの国にやつて来た。戦後驚異的な進歩を世界に見せつけた、この日本という不思議な国に。

目的地を指示されたタクシーは、ゆっくりと走り始める。

車窓から美しい桜並木を眺めるラトは、少し切ない表情をしていた。

『……そのために、スカーフ作戦を仕掛けたのだから』

『ああ、そうだったな』

ハシムは思い出す。いきなりラトに提案されてびっくり仰天した『作戦』を。

あの日の夜。実優に向かつてスカーフを投げたのは、彼女に説明したような浮ついた理由ではない。本当は、件の老舗ホテルのレストランでラムジが実優を気に入っていることを知り、彼の行動を監視する目的で、実優に近づいたのだ。

『だが、あの男が実優を選んだことがつくづく腹立たしい。彼女は、本当は私たちの事情に関わらないはずだった。それなのに、あの会社の本社がなぜか接待役を東京支社に押しつけたんだ。そんなことをしなければ、彼女の平穩は守られていたのに』

ハシムは座席シートに背中を預け、フロントガラスから景色を眺めた。

『ラトからしてみれば、ラムジと好みの女のタイプまで一緒なんだ。余計に腹も立つというところか』

『どうかな。ラムジが彼女に目をつけたのは気にいらないが、あの男と私は、彼女を好きになった理由がまったく違うよ』

そう口にしたラトの目は穏やかだった。うつとりと愛でるように、窓から桜並木を見ている。だが、おそらく彼の心は別のところにあるのだろう。

今、ラトの心は実優のもとにある。遠い異国に足を踏み入れて、彼は人生で初めての恋をしてしまった。

だからこそ、ハシムは危惧している。

ラトはどんな不幸に落とされても絶望しない。諦めが人一倍悪く、今も足掻き続けている。

一度決めたら手段を選ばない男が、いったい彼女になにをするのか。

(平穩が似合うと言ったのはラト、お前だ。それなのにまさか彼女から平穩を奪うつもりなのか?)  
ハシムはラトをたしなめはするが、彼の行動を完全に止めはしない。

いや、できないのだ。セルデア国民にとってラトは特別な人である。そして、彼が胸に秘める野望を聞いた時、自分はこの方についていこうと心から決めた。

『ああ、でも。ハシムが言ったことは半分はアタリかな』

そう言つて、ラトは薄く目を細めた。

『実優の魅力は、私だけが知っていればよかったことだ。ラムジの目に彼女の姿が映ったのだと思うだけで、あの青い目をえぐり出したくなる』

仄暗く笑う。その表情は、絶対に実優に見せることはない、彼の本性だ。

—— 確固たる目的があつて、日本にやつてきたラトとハシム。

だが、実優を見つけた途端、ラトの様子がガラリと変わった。

持ち前の調査能力で実優のすべてを調べ尽くし、自由時間が五分でもできたら実優を探しに行く。正直、ハシムが引いてしまうほど完璧な尾行で、彼はずっと実優をうしろから追いかけて回していた。恋をした、というのは本当なのだろう。こんなラトの奇行は、幼少より共に過ごしてきたハシムも初めて見た。

しかし最初の頃は、それでも自身を抑制していたのだろうとハシムは思う。誰よりも自分の立場を理解しているラト。さすがに実優を自分の世界に引き込むことだけはためらっていたのだろう。

だから、見ているだけに徹していたのだ。せめて日本にいる間は彼女を見守って、大切な片想いを胸に抱きながら、母国に帰ろうと決意しているそぶりを見せていた。

しかし、ラムジが実優を気に入ったせいで、事態は大きく変わる。

さすがに放っておくことができなかったラトは実優に近づき、彼女との交流を始めて、ラムジの行動を監視することにした。

実優と話しているラトは、本当に幸せそうだった。

でも、だからこそハシムは胸が痛んだ。

見ているだけなら良かった。でも、言葉を交わせば触れなくなるものだ。そして一度でも触れたら止まらなくなる。もっと触れたい。もっと探りたい。愛という名の酒がグラスからあふれて零れるように、ラトは恋に酔い、夢中になる。独占欲は留まるところを知らず、彼の瞳にはもう、彼女しか映っていない。

そう、ラトは決めてしまった。実優と言葉を交わして、彼女の微笑みを目の前で見たからこそ、決意してしまった。

—— ラトが女性を愛するということは、間違はなく、その女性の日常を壊してしまう。

ハシムは心から実優を不憫に思い、同情した。

いつそなんらかの危機感を覚えてすぐさま逃げてほしいくらいだ。しかし、ラトは諦めない男だから、地の果てまで追いかけるだろう。となれば、彼女に逃げ場はない。

(すまない……実優)

自分はラトを止められない。ハシムはせめて心の中で実優に謝罪することしかできなかった。